

「数学基礎論および歴史分科会」の名称について

分科会運営員（2012年9月～2015年9月）

真島 秀行（お茶の水女子大学）

1949年発足当初から当分科会の正式名称が現在と同様の「数学基礎論および歴史分科会」であることを日本数学会の記録を調査し判明したと考えられますのでその報告を2013年3月に当時の運営員会に対して致しました。

その事の経緯は次のようです。

2013年3月の日本数学会年会前に、春の年会と秋の秋季総合分科会のプログラムの公開とアブストラクトの公開に関わって分科会の名称をどう書き表すかを理事会に回答する必要がありました。

当時の連絡責任評議員の隈部先生から運営委員会へ問い掛けがあり、日本数学会の張事務長にご協力いただいて、以下に説明するような調査をした結果、発足当初から「数学基礎論および歴史分科会」であったという結論に至りました。運営委員会の結論として、隈部評議員から、理事会にそのように回答されました。正式には2013年3月の日本数学会年会時における分科会総会で承認されました。

以下で、資料に基づき分科会の正式名称が「数学基礎論および歴史分科会」であることを説明します。

日本数学会は1946年6月2日に創立総会を開催し発足しています。その記録によれば議事として「定款案及び細則案委員会附託とする」とあり、その時点では確定していなかったと思われます。現在は一般社団法人となり定款と運営規定が学会運営の基本的なものとなりましたがそれ以前は定款と細則でした。1947年日本数学会のときの名簿には、定款・細則は掲載されてなく、1949年度は名簿がなく、1951年3月版の名簿には定款と細則は掲載されていますが、細則第8条に「分科会を組織しようとする会員はその組織事業などについて会則を定め委員会の承認を受ける」とだけあり、どの分科会名も掲載されていません。1952年8月版の日本数学会会員名簿にも定款と細則が掲載されていて、細則第7条に9つの分科会が列記され、その一番目に「数学基礎論及び歴史」という分科会名称が書かれています。なお、1952年以降は1953版、1954年版の名簿がありますが、本当に単なる氏名リストで、定款や細則に関するものは掲載されていません。1968年からは必ず、名簿に定款と細則が掲載されて、定款に制定の日付が書かれています。細則には、改正の日付しかありませんが、その一番初めの改正日は1951年10月27日となっていました。以上のことから考えると、分科会名が最初に記載された細則は、1951年10月27日のもので、その時点では発足時より2つの分科会が追加されたのが反映されたものになったと考えられます。

雑誌“数学”の第10巻までは年会と秋季の会（1952年までは例会、1953年以降は総合分科会）の講演記録があり、それによれば、発足当時は7分科会しかありませんでしたが、その後、実函（関）数論分科会と当分科会が追加されたことがわかります。実函（関）数論分科会が1947年5月10日に初会合を開催し運営方針についての条項を定めたことの明確な記録があるのに対して、当分科会の正式発足がいつかを示す明確な記録を見出すことはできません。しかし、1947年年会記録から、「数学の基礎の会」があり、それが発展解消して「数学基礎論および歴史」分科会となったと考えられます。

1947年年会の際には「数学の基礎の会」で数学史の加藤平エ衛門氏が講演しています。1947年秋季例会では「数学基礎論及位相解析」でひとつの会場を使用しています。1948年年会では「数学基礎論」で一つの会場を使用していますが、近藤洋逸氏の数学史の講演も含まれていますし、「数学の基礎の会」も開催されています。1948年秋季例会、1949年年会も同様ですが、1949年年会（5月26日～5月29日、於東大理学部第1号館）の記録にプログラムの後ろに、日本数学会の日本学術会議に協力する専門別委員と地方別委員選挙結果があり、専門別委員の欄に

基礎論及び歴史 黒田成勝

との記載があります。これが日本数学会の記録の中で「基礎論及び歴史」という名称が現れる最初のものであります。

一方、会報には一般講演の申込等の案内が掲載されてきましたが、1976年11月の会報38までは、一般講演申込の際のアブストラクトに関する注意書きのところに、「数学基礎論」とありました。1977年6月の会報では1977年秋季総合分科会（東京数学会社設立から100周年のときです）からは「基礎論」とありました。プログラム表紙には「数学基礎論」、内題も「数学基礎論」が、1996年2月発行プログラムまで続きますが、これはずっと略称を用いたものと考えられます。

その後、「数学通信」に会報が収録されるようになった1996年を見ると、一般講演申込の際のアブストラクトに関する注意書きのところは依然として、「基礎論」ですが1996、1997年8月発行プログラム表紙では「数学基礎論」、内題は「数学基礎論および歴史分科会」、1997、1998年2月プログラム表紙では「数学基礎論および歴史」、内題は「数学基礎論および歴史分科会」、この辺りからは正式名称「数学基礎論および歴史分科会」を通常使うようになりました。1996年8月の会報82から、分科会報告は、「(1) 数学基礎論および歴史分科会」という表題の下になされています。また、1996年11月の会報83に以下の報告があるように、現在の分科会運営委員会が組織されました：「1996年秋季総合分科会期間中に行われた事務連絡会議において、当分科会における意見集約、情報伝達を速やかに行うために、基礎論分科会運営委員会を発足されることが了承されました。なお、運営委員会は専門ごとのグループ（歴史、MLG、超準解析、理論計算機科学、集合論と一般帰納的関数論、計算論、証明論、モデル論）の代表者、当分科会から選出された数学会雑誌編集委員および評議員から構成されます（責任評議員 坪井明人記）。」

蛇足ですが、発足時「位相数学」分科会が1973年10月から「関数解析」分科会と「トポロジー」分科会に分かれ、現在に至っています。なお、1995年秋季総合分科会のおきから無限可積分系は分科会ではなくスペシャルセッションとして加わっています。